

聖書：ルカ 23：44～49

説教題：わが霊を御手に

日時：2013年3月10日

イエス様がついに十字架上で死なれた場面です。そこには二つの不思議なしるしが現れました。一つ目は全地が暗くなって、午後三時まで続いたことです。本来は一番明るい真昼に、太陽は光を失い、辺りは暗くなりました。これはイエス様が私たちの身代わりを果たすために、霊的な暗やみの下にあったことと関係するのだと思われます。コロサイ書に「この世界は御子によって造られ、・・御子にあって成り立っている」とありますが、この世界を造り、支えている御子が大変な苦しみを受けていたので、その世界も本来の輝きを失い、御子の苦しみを映し出すような状態にあったと考えられます。

もう一つのしるしは神殿の幕が真っ二つに裂けたことです。これは神殿の一番奥にある至聖所とその前の部屋とを仕切る垂れ幕のことです。旧約時代では聖なる神と人間との間の距離、近づき難さが強調されていて、至聖所に入れるのは民の中の大祭司だけでした。しかも年一回、贖いの日だけでした。しかしイエス様が十字架上で払われた犠牲によって、その幕が真っ二つに裂けた。これは今やイエス・キリストによって神に大胆に近づく道が開かれたということです。ヘブル書 10章 19節 20節：「こういうわけですから、兄弟たち。私たちは、イエスの血によって、大胆にまことの聖所に入ることができるのです。イエスをご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのためにこの新しい生ける道を設けてくださったのです。」

こうした中で、46節にイエス様の十字架における最後の言葉が記されます。十字架上のイエス様の言葉は福音書に合計7つあり、「十字架上の7つの言葉」と呼ばれますが、ここにあるのはその最後の言葉です。46節：「イエスは大声で叫んで、言われた。『父よ。わが霊を御手にゆだねます。』こう言って、息を引き取られた。」皆さんはイエス様の十字架上の7つの言葉を全部言えるでしょうか。おそらくみなが真っ先に上げるのは、「エリ、エリ、ラマ、サバクタニ」、すなわち「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」という叫びではないかと思います。イエス様はあの時、大変な苦しみの中にありました。父なる神と永遠の昔から一つの関係に生きて来たお方が、私たちの罪のために全くの暗やみに切り捨てられるという苦しみのただ中にありました。しかしイエス様は、その叫びを発しながら死んで行かれたのではない。46節で再び「父よ！」と神に向かって呼びかけています。そして「あなたに委ねます」という信頼の言葉を発する中で、ご自身を明け渡して行かれた。私たちは「エリ、エリ、ラマ、サバクタニ」という言葉だけではなく、「父よ、わが霊を御手にゆだねます。」というこの言葉を通して、イエス様の十字架を正しく見るように導かれるのです。

まず私たちは、この十字架のみわざは、父なる神と御子キリストの一致の中でなされたことを知ります。もしイエス様が「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と悲しみ叫びながら息を引き取ったなら、どうでしょう。イエス様は力づくで死の下に沈められ、無理やり痛み苦しみを担わされて死んで行ったこととなります。それを見る私たちはイエス様に取り返しつかない犠牲を負わせてしまったということで、永遠にその心が責められることになるでしょう。しかしイエス様は「父よ」と呼んで、父なる神と一体の交わりにあるお

方として、このみわぎをなされました。すなわちこの十字架のみわぎは、父なる神がご計画してくださったことであり、またイエス様もそれに心から同意してなされたみわぎであるということです。

二つ目に分かるのは、イエス様は父なる神と一致の中にあられただけでなく、ご自分から自発的に身代わりの死を成し遂げられたということです。イエス様は人からいのちを取られたのではありません。ヨハネ 10 章 18 節：「だれも、わたしからいのちを取った者はいません。わたしが自分からいのちを捨てるのです。わたしには、それを捨てる権威があり、それをもう一度得る権威があります。わたしはこの命令をわたしの父から受けたのです。」 十字架につけられた人は、最後はいつ死んだのか分からないような状態で衰弱して死ぬと言われます。しかしイエス様はこの時、大声を出せる状態にありました。つまりイエス様は嫌々いのちを取られたのではなく、ご自身の意志をもって父の御心に従い、私たちのためにいのちを捨ててくださったのです。

しかし「自発的に」と言うあまり、私たちはこれを何か簡単なことのように考えてはなりません。イエス様がこの死をどんなに恐れたかはこれまでも見て来ました。イエス様はともすれば目をそむけたくなる誘惑と戦いながら、エルサレムに向かって進んで来られました。またその死を思って、わたしはどんなに苦しまなければならないことかと言われました。十字架前夜のゲッセマネの園では、汗が血のしずくのように滴り落ちるほどの格闘をされました。そして十字架上では、「エリ、エリ、ラマ、サバクタニ」と叫ばれ、耐えられないような苦しみを経験しておられました。そしてついにご自身にとっては未知の死の状態へ飛び込もうとしています。しかしイエス様は父なる神を信頼して、この最後のわざを果たそうとしておられた。それはまるで水泳をする人が初めて高い飛び込み台から飛び込むことのようにです。はるか下にある水へ初めて飛び込む人は、躊躇する心、ひそかな不安を通り抜けなければなりません。そしてイエス様の場合、下にあるのは死という海です。恐ろしいさばきの海です。しかし父なる神が必ずその御子を受け止めて、復活させてくださるという約束が与えられています。そんな中、イエス様は父なる神を全く信頼して、死の海へ飛び込み、沈んだのです。イエス様はその際、大声で「父よ、わが霊を御手にゆだねます」と叫ばれました。これはイエス様にそれだけ大きな戦いがあった事を暗示しています。しかしイエス様は父なる神に対するより勝る信頼をもって、そしてご自身の民を必ず救いに導く勝利の叫びとしてこの言葉を発されたのです。その叫びをもって、この聖なる方がついに私たちのための死へとご自身をささげられたのです。

このイエス様の姿は、これを見る人たちに強烈な印象を与えました。まず百人隊長は神をほめたたえ、「ほんとうに、この人は正しい方であった。」と言いました。彼は十字架刑の陣頭指揮を取った人で、十字架の下で一部始終を見ていた人でしょう。彼はローマ総督ピラトが「この人には罪がない」と何度も言っていたのを聞いていたかもしれません。また十字架に上げられて後、普通なら当然見られるであろう怒りや苦々しさが、その顔に見られないのを見ていたでしょう。それどころか、イエス様はご自分を十字架につけた者たちのために祈られました。また一緒に十字架に付いていた犯罪人の心を変え、彼に驚くべき平安をもたらしました。人に恨みつらみを述べるのではなく、ただ父なる神を見上げて会話し、ついに大声を上げて「父よ、わが霊を御手にゆだねます。」と述べ、全幅の信頼をもってご自身を明け渡された姿を見届け

た時、百人隊長の心は深く揺り動かされずにいなかったのです。この十字架上のイエス様と、目には見えない天の父とのやり取りは、この方が本当に正しい方であって、まことの神の子であるとの強力な印象を百人隊長の心に植え付けずにいなかったのです。

群衆もそうでした。彼らは民衆が、イエス様を十字架につけろ！と叫んだのを聞いていたかもしれません。いや彼らの多くがそう叫んだ人たちだったかもしれません。しかし彼らは、このイエス様の十字架の死を見て、胸をたたいて悲しまずにいられませんでした。そこで死なれた方は本当に正しい方であったこと、罪のない方をこのような仕方ですら死に至らせたことを思っ、みな胸が締め付けられるような思いになったのです。

そして49節：「しかし、イエスの知人たちと、ガリラヤからイエスについて来ていた女たちとはみな、遠く離れて立ち、これらのことを見ていた。」この人たちがどう感じたかは何も書かれていません。かえってそこに一層悲しみの深さが示されているようにも思います。この人々はなすすべもなく、遠くからただ見守らざるを得ませんでした。そして一部始終を見届けました。愛するイエス様がこうして息を引き取られたことを。しかしイエス様の「父よ、わが霊を御手にゆだねます」との最後の言葉は決して虚しい言葉でなかったことを、この人々は知ることになります。イエス様はこの後よみがえられ、このイエス様について来た女たちこそ、そのイエス様に一番先に会う人たちとなるのです。

以上の箇所から二つのことを申し上げて終わりたいと思います。その一つ目は私たちの救いはこのイエス様の最後の最後まで従順の生活によって勝ち取られたということです。十字架上の最後の言葉、「父よ、わが霊を御手にゆだねます！」との言葉、そして大声でこれを叫んでご自身をささげられた姿は、イエス様の従順の生涯の結晶です。神は罪に落ちた私たちを身代わりの死を通して救うことをご計画し、ご自身の尊い一人子を遣わして下さいました。御子なるイエス様はこの御心に従うために、どんなに大きな苦しみを負い、犠牲を払われたことでしょう。イエス様は十字架から目をそらさず、一つ一つ戦ってそれらを乗り越え、ついに十字架に上り、ご自身のすべてをささげるところまで進んで下さいました。イエス様の地上の一生を振り返って思うことは、ただ私たちの救いのためにご自身を与える歩みであったことです。仕えられるためではなく、仕えるためにこの地上を歩き、ご自身の一生をささげ尽くして下さった。その頂点が、このイエス様の十字架上の最後の言葉、「父よ、わが霊を御手にゆだねます。」に見られます。イエス様は私たちに益を与えるために、ご自身のすべてを使い果たして下さった。私たちはそのイエス様を見上げる時、私たちとあまりにも違う生き方に、愛のお姿に打たれずにいません。新聖歌 99 に「すべてのものを与えしすえ、死のほか何も報いられで」とありますが、そのようにただ与えるためにだけ、ご自身の命を、その全身全霊をささげ尽くして下さいました。私たちはその方の前にただただひれ伏して、礼拝するより他ありません。そしてイエス様がこうして備えて下さった尊い救いを感謝して受け取らせていただきたいと思うのです。

そしてもう一つのこと、もしこのイエス様の姿に私たちの心が少しでも動かされるなら、私たちもまたこのイエス様に倣う歩みへ召されているということです。イエス様が私たちのような他者のためにご自身を与えて、一生を歩んで下さったことに私たちの心が揺り動かされるなら、私たちもいくらかでもそのような歩みをする者になりたいという願いを持つはずでし

よう。そして私たちにとってのチャレンジは、イエス様はこれを私たちと同じ人として成し遂げられたということです。もちろん私たちがたとえ誰かのために自分をささげても、私たちの行為がイエス様のような贖いの力を持つわけではありません。すべての人を救うための十分な贖いを、イエス様こそが成し遂げてくださいました。しかし私たちはイエス様を心から尊敬し、愛する者として、自分もまた他の人のためにそのように自分をささげて歩む愛の人になりたいと願われます。私たちはそうして人に与える人生を歩む時、たとえ思わぬ犠牲を払うことになったとしても大丈夫です。なぜならイエス様がすでに私たちの究極的な救いを勝ち取ってくださったからです。「父よ、わが霊を御手にゆだねます」とイエス様が祈られた時、それはご自身のことだけではなく、ご自身のわざによって救うすべての人のことも含んでいた、とカルヴァンは言っています。ですから私たちはこのイエス様の犠牲と祈りによって、父なる神の御手の中に守られており、握られている者たちです。どんな危機的状況にあっても、イエス様のゆえに父なる神の御手の中で救われ、守られていることを喜び、自らも「父よ、わが霊を御手にゆだねます」といつも祈ることができるのです。私たちはそうしてイエス様を礼拝し、愛するイエス様の足跡に従って、神の栄光のために自らをささげ、用いていただく歩みへ進みたいのです。